

# 琉球大学学術リポジトリ

## 中学校における英語教育の実態調査(2) : 沖縄県F中学校における事例から

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2015-11-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 賢, 赤嶺, 美奈子, 宮里, 征吾, 浜田, 麻由子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/32274">http://hdl.handle.net/20.500.12000/32274</a>

# 中学校における英語教育の実態調査(II)

## ～沖縄県 F 中学校における事例から～

大城賢\*, 赤嶺美奈子\*\*, 宮里征吾\*\*\*, 浜田麻由子\*\*\*\*

A Study of Junior High School English Education Based on the Analysis of Eiken English Proficiency Test and the Questionnaire (II)

Ken OSHIRO\*, Minako AKAMINE\*\*, Seigo MIYAZATO\*\*\*, Mayuko HAMADA\*\*\*\*

### I 調査の目的

平成 25 年度に、文部科学省から「英語教育改革実施計画」(以下、「実施計画」という)が公表され、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した英語教育改革の骨子が示された。その後、「実施計画」に基づき、有識者会議が発足し、その具体化に向けた議論が展開され、平成 26 年 9 月には、報告書が提出された。今後、小学校からの英語教育の拡充・発展が図られ、中・高の英語教育も新たな展開を求められるものとなろう。

さて、英語教育改革を進めるには、現場の実態を把握することも一方では必要である。全国学力テストは国語、算数・数学の 2 教科を対象に、小学校 6 年生と中学校 3 年生で実施されている。英語は実施されていない。したがって、現在のところ、日本の小中学生の英語力がどの程度なのかということを示す客観的なデータは極めて少ない。そこで、筆者らは、第 1 段階として、沖縄県における児童・生徒の英語力や情意面の実態調査に取りかかった。調査の結果は「指導条件の違いがスキル・態度面に及ぼす影響～児童英検の結果を踏まえて～」<sup>1</sup>や「中学校における英語教育の実態

調査(Ⅰ)～沖縄県 A 中学校における事例から」<sup>2</sup>(以下、「実態調査Ⅰ」という)として発表した。

本調査は「実態調査Ⅰ」に続くものである。実態調査Ⅰ(A 中学校の場合)においては次のようなことが明らかになった。

- ・英検 3 級合格レベルにある中学 3 年生は 24% であった。
- ・3 年生には、2 極化の傾向がみられた。
- ・通塾生と非通塾生を比べてみると、両グループに統計的な有意差はなかった。
- ・部活動参加者と部活動不参加者の間には統計的な有意差はなかった。
- ・予習・復習・宿題と成績との相関は予想したほど高いものではなかった。予習・復習・宿題はしているものの、それが直接成績につながらないグループが存在することがわかった。
- ・「(英語が)好き・どちらかという好き」を合わせた生徒の割合は 3 学年とも 6 割を超えていた。
- ・授業の理解度について、70%以上理解しているとした生徒は 1 年生で 33%、2 年生で 33%、3 年生で 46%であった。
- ・態度面とスコアの関係は 3 学年を通して正の相関があった。英語学習にポジティブな態度であればあるほど英語の成績は高いことが分かった。

今回の調査は沖縄県の F 中学校を対象に行った。アンケート調査は全学年で行ったが、諸般の事情から英語能力判定テストは 1 学年のみでの実施となった。1 学年においては、英語能力判定

\* 琉球大学教育学部

\*\* 沖縄県宜野湾市授業改善アドバイザー

\*\*\* 沖縄県渡嘉敷村立渡嘉敷中学校

\*\*\*\* 公益財団法人日本英語検定協会

<sup>1</sup> 大城、宮里、石川、浜田、「琉球大学教育学部紀要」、2014 年 2 月

<sup>2</sup> 大城、宮里、浜田、「琉球大学教育学部紀要」、2015 年 2 月

テストを通して、英語力の実態を明らかにし、情意面との関連を探る。また、F中学校の指導の概要を記し、アンケートや英語能力判定テストの結果と重ねて、今後の授業改善に役立てたい。

## II F中学校の概要

F中学校は沖縄県の都市部に所在する学校である。調査時点(2015年1月)では生徒数732名、1学年8学級、2～3学年6学級、合計20学級であった。部活動も盛んな学校である。

## III 調査の概要

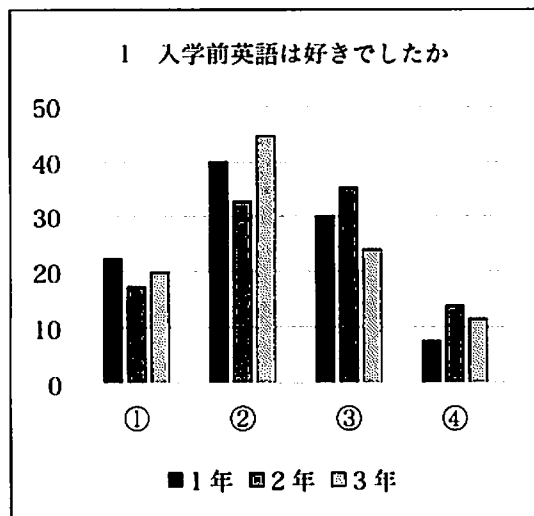
生徒の情意面の状況を調査するため、筆者らが作成したアンケートを実施した。アンケートの内容は以下の13項目からできている。項目11～13以外は全て「①強くそう思う、②思う、③思わない、④全く思わない」の4件選択法をとっている。アンケート項目の1～3までが英語に対する好悪、4が英語理解に対する自己評価、5～7が国際社会における英語の果たす役割についての認識、8～10が家庭学習の状況、11が通塾の状況、12が部活動の状況である。アンケートは2014年12月に全学年・全クラスにおいて実施した。

生徒の英語力を調査するために、1学年においては、英語能力判定テストを全クラスで実施した。使用した英語能力判定テスト(Test D)は受検者の英語力を5級から3級の範囲で調査することができる。筆記50問(35分)、リスニング30問(15分)から構成されており、満点スコアは460点である。筆記は「語彙・熟語・文法」、「英文構成」、「読解」の3つの分野からできている。

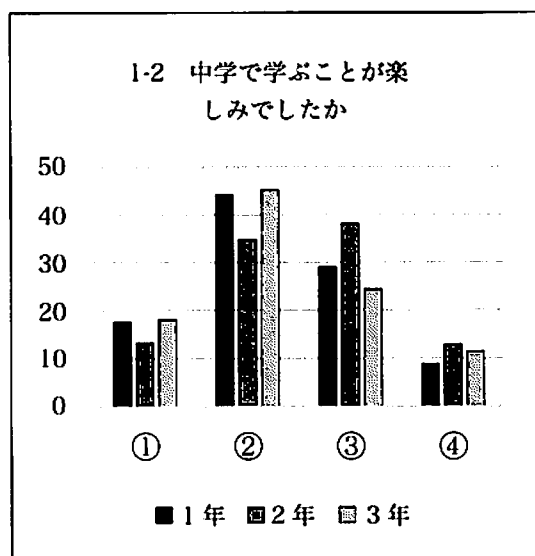
## IV 結果と考察

はじめに、全学年・全クラスへ行ったアンケート調査から、その結果を検討する。次に、1年生を対象に行ったテストから、英語力の実態を明らかにし、情意面と成績との関連について検討する。

### 1. 全学年・全クラスへのアンケート調査から

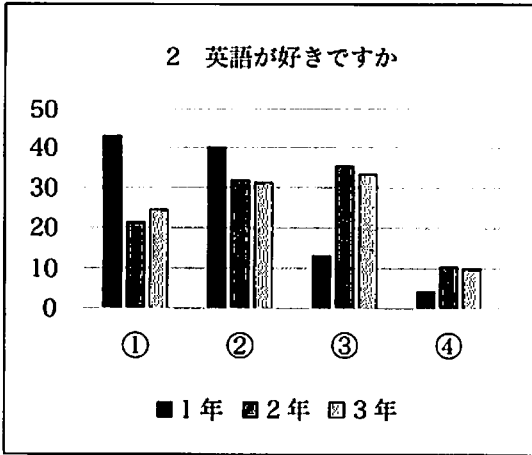


「入学前英語は好きでしたか」という質問項目に対して、1年生は「とても好き」と「好き」を合わせると62.5%、2年生は50.3%、3年生は64.6%となっている。2年生は小学校の時に「英語が好きだった」という割合が最も低く、後述するように、その事が、中学校以降の英語の好悪に影響している可能性がある。

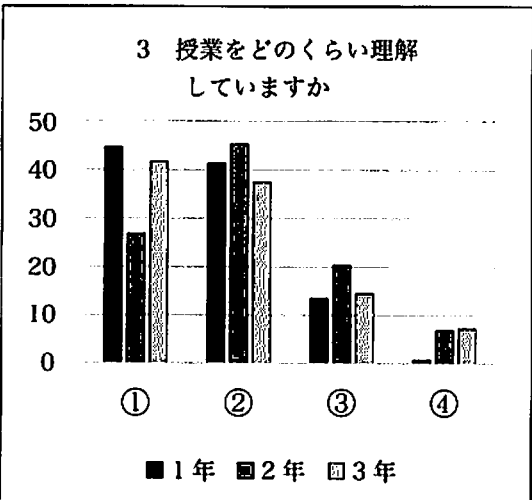


「中学校で学ぶことが楽しかったですか」という質問項目に対して、1年生は「とても楽しみだった」「楽しみだった」を合わせると62%、2年生は48.2%、3年生は63.5%となっている。1の「小

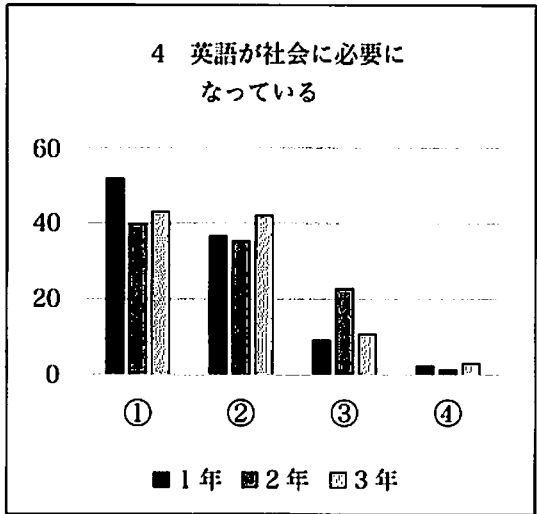
学校の英語は好きでしたか」という質問項目に対する回答とほぼ同じ傾向を示している。つまり、小学校で「英語が楽しかった」と答えた児童は中学校での英語を楽しみにしている割合が高くなることを示唆している。



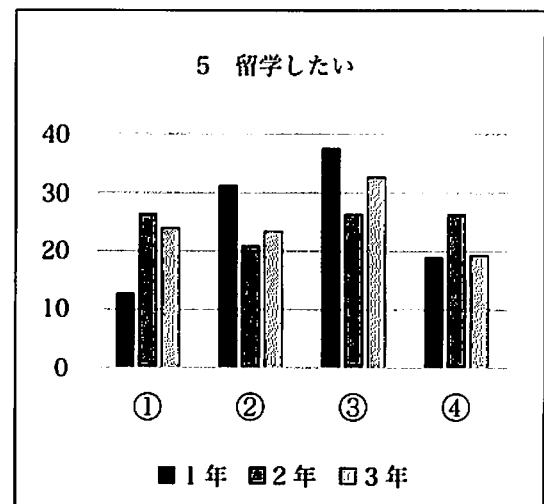
「英語が（現在）好きですか」という質問項目には、1年生は「とても好き」「好き」を合わせると83.1%、2年生は53.3%、3年生は55.8%となっている。1の「入学前英語が好きでしたか」と比べると、1年生は20.6%英語が好きになった生徒が増えている。その理由について、1年生を担当した指導教員へインタビューしたところ、英語の苦手な生徒に対しては、ペアやグループ活動などで授業参加を促し、授業内で様々な活動を通し、それぞれが達成感を持てる活動や生徒の課題に合った授業作りに配慮をしたということであった。



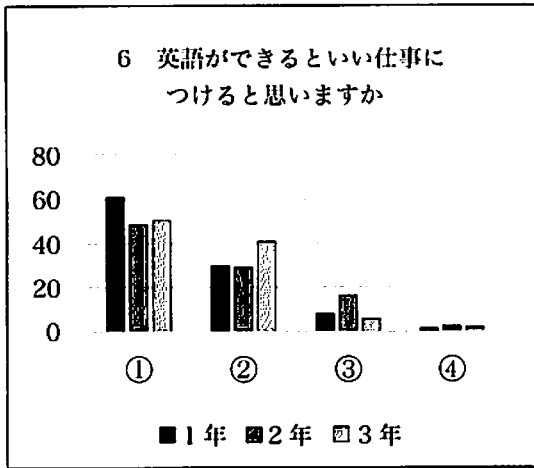
「授業をどのくらい理解していますか」については、1年生は「とても理解している」が44.7%、2年生が26.9%、3年生が41.7%となっている。2年生がやや落ち込んでいる。「とても理解している」と「理解している」を合わせると1年生は86.1%、2年生は72.2%、3年生は79.2%となっている。2年生が他の学年に比して若干低くなっている。



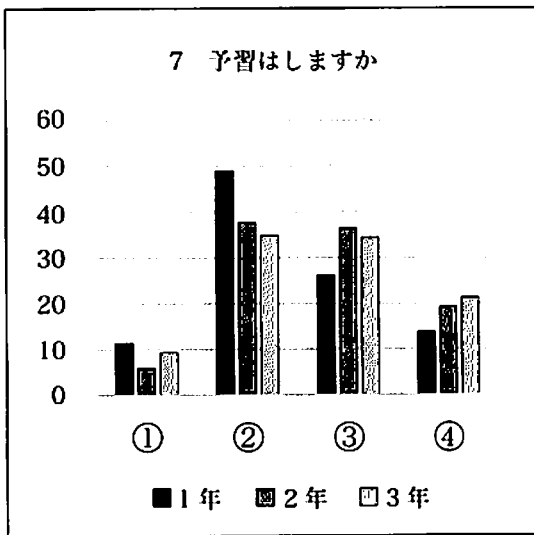
「英語が社会に必要なになっている」という質問項目に、1年生は「とてもそう思う」「思う」を合わせると88.6%、2年生は75.2%、3年生は85.4%である。ここでも1年生と3年生は85%以上が「そう思う」と答えているのに対して2年生は75.2%と若干低い割合になっている。



「留学したいと思うか」について、1年生は「とてもそう思う」「そう思う」と合わせると43.9%、2年生は47.3%、3年生は47.4%である。この質問項目では2年生が3年生とほぼ同じで高い割合を示している。

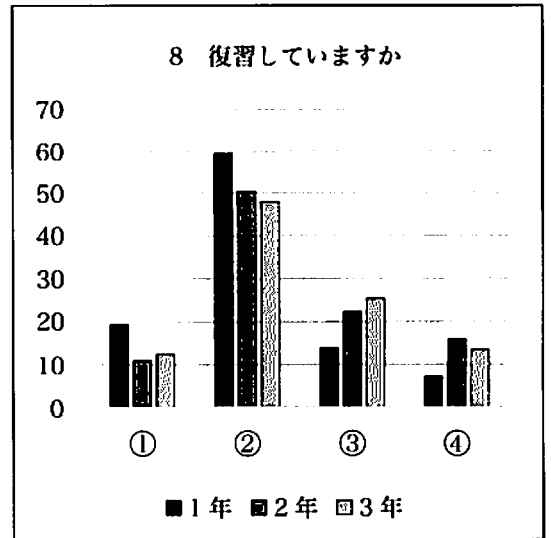


「英語ができるといい仕事につけるとおもいますか」については、1年生は「とてもそう思う」「思う」を合わせると91.2%、2年生は78.2%、3年生は91.7%である。1年生と3年生はいずれも90%以上の生徒が「そう思う」と回答しているが、2年生は若干低く78.2%である。

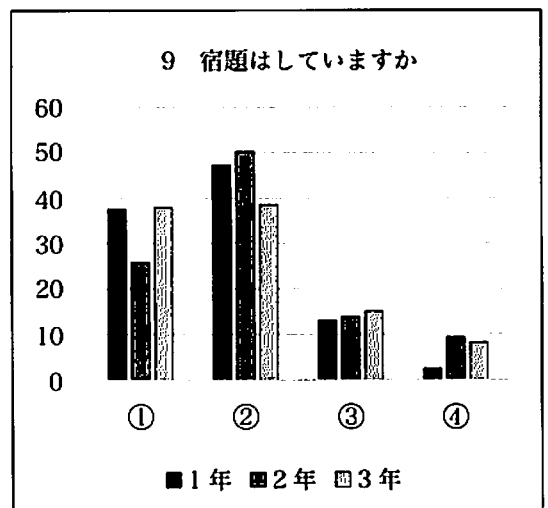


「予習はしますか」の質問項目には、1年生は「よくする」「する」を合わせると60.4%、2年生は

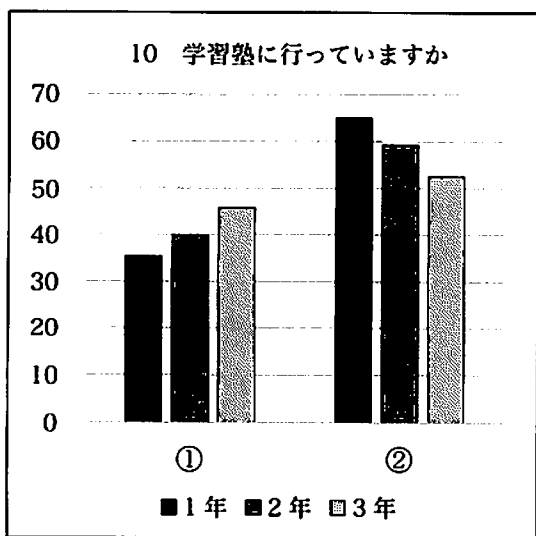
43.8%、3年生は44.3%である。予習をする割合は1年生が最も高い。



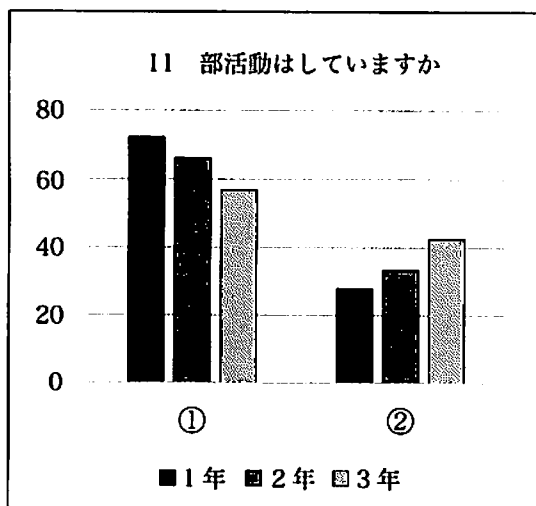
「復習していますか」という質問項目に対しては、1年生は「よくする」「する」を合わせて78.9%、2年生は61.3%、3年生は60.4%である。1年生が最も割合が高く、2年、3年になるにしたがって低くなっている。



「宿題はしていますか」の質問項目には、1年生が「よくしています」「しています」と合わせると84.9%、2年生は76.2%、3年生は76.6%となっている。1年生が宿題をする割合が高く、2、3年生は若干低くなっている。



「学習塾に行っていますか」という質問項目に「はい」と答えた1年生は35.4%、2年生は39.8%、3年生は45.8%となっている。通塾生の割合は3年生が最も高い。



「部活動をしていますか」という質問項目に「はい」と答えた1年生は72.2%、2年生は66.2%、3年生は56.8%となっている。

全体を通してみると、英語に対する態度（「入学前は英語が好きでしたか」、「中学校で英語を学ぶことが楽しみでしたか」、「英語が現在好きですか」）の全ての項目で、2年生が他の学年に比べて低くなっている。また、「授業をどのくらい理

解していますか」という質問項目に対しても、2年生が他の学年に比べて低くなっている。後述するように、態度面と成績（授業の理解）には相関があるが、この結果は、それを裏付けるものとなっている。

「英語が社会に必要なになっている」という質問項目に対して、「そう思う」と答えた生徒は3学年の平均で8割を超えている。「英語ができるといい仕事につけるとおもいますか」については9割近くが「そう思う」と答えている。生徒は、英語は今後益々必要になってくると考えていることや、英語ができると将来は有利である、と考えていることがわかる。

ところが、「留学したいか」という質問に対しては、「そう思う」と答えている生徒は5割にも満たない。「高校生の生活意識と留学に関する調査：日本・アメリカ・韓国の比較」によると、「留学したいと思わない」という日本の高校生は52.3%で、4ヶ国中最多である。また、同調査は、留学したくない理由として、「自分の国が暮らしやすいから」「言葉の壁があるから」「外国で一人で生活する自信がないから」が多いことをあげている<sup>3</sup>。

本調査においても、中学生は英語の必要性についての認識は高いが、留学への希望は半分にも満たない結果となっている<sup>4</sup>。留学したくない理由については質問項目に含めていないため不明であるが、グローバル化していく国際社会において、たとえ自分の国が暮らしやすいからと言って、他国に関して無関心であることは望ましいこととは思えない。「言葉の壁」については、それを乗り越えていく意欲も必要と思う。また、どの国も全て安全だと言える訳ではないが、一人でも海外に出かけて行ける自信は付けたいと思う。

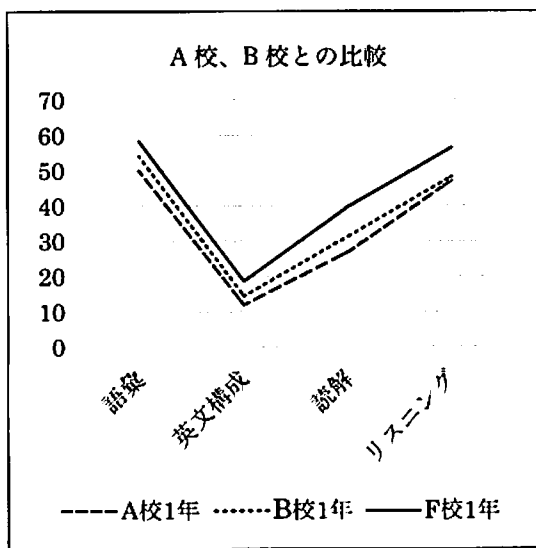
<sup>3</sup> 「高校生の生活意識と留学に関する調査報告書：日本・米国・中国・韓国の比較」財団法人一ツ文芸振興会・財団法人日本青少年研究所、2012年

<sup>4</sup> 「国際比較からみた日本の高校生：80年代からの変遷」（日本青少年研究所、2014年）によると、「もし可能なら留学したいと思うか」という質問に、「留学したい」と答えた中学生は37.4%である。F中学校は全国平均よりも高いが、それでも米国、中国、韓国と比べると低い結果となっている。

2. 1年生の英語能力判定テストとアンケートから

(1) テスト結果の概要

2015年1月29日に実施したF中学校1年生の英語能力判定テストの平均点は172.3点である。この平均点をF中学校とほぼ同じ規模のA中学校1年生(202名、2014年1月実施)とB中学校1年生(186名、2013年2月に実施)と比較してみた。A中学校は137.8点、B中学校は147点であり、F中学校が平均点で20点から30点の差をつけて最も高くなっている。分野別の平均点と併せて示したのが以下のグラフである。



	A校	B校	F校
語彙	50	54	58
英文構成	12	14	18.3
読解	27	31	39.7
聴解	47	48	56.3
合計	136	147	172.3

グラフを見ると明らかなように、分野別で見ると、3校とも同じ傾向となっている。英文構成が最も低く、語彙とリスニングが他と比べると高くなっている。

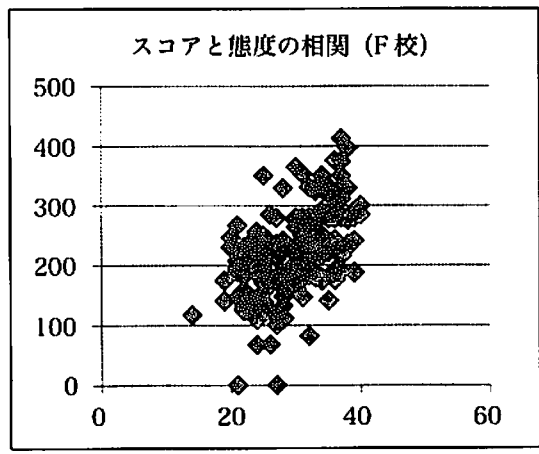
語彙、英文構成においては3校とも大きな差はないが、読解とリスニングにおいてはF校のほうが約8～10点程度高くなっている。その理由について、指導を担当した教員へインタビューし

たところ、リスニング力が高いのは小学校での英語の授業時数の差ではないか、ということであった。A校及びB校の場合は小学校3年生から6年生まで週1回の外国語活動であるが、F校の場合は1年生～2年生が週1時間、3年生から6年生が週2時間の授業時数である。授業時数の違いが英語力の違いとなって表れることは筆者らの研究からも明らかになっている<sup>5</sup>。リスニングについては小学校での英語教育が大きく影響している可能性がある。

一方、読解力が高い理由については、リスニング力との関連がある可能性がある。指導教員の話によると、F中学校に入学してきた生徒は、ある程度のまとまった英語を、曖昧さに耐えながら聞き続ける態度が養われているということであった。そのような態度は読解においても発揮されている可能性がある。多少分からない語彙があっても理解しようと英文を読み続けたことが読解力の点でも他の学校との差となって表れた可能性がある。

(2) テストスコアと態度面の相関

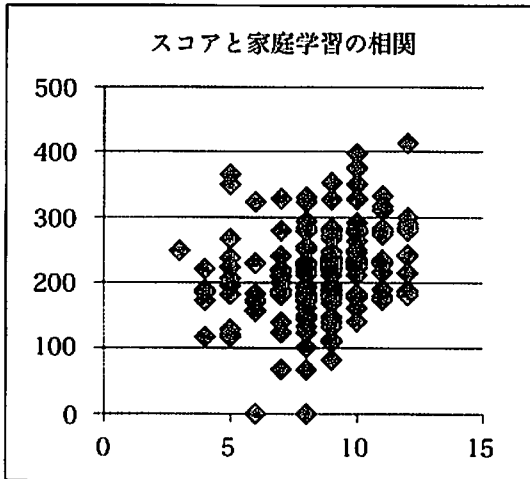
テストの点数と態度面の相関を調べた。態度面は前述したアンケートの回答項目を点数化した。例えば「英語は好きですか」という質問に対して「①とても好き」を4点、「②どちらかという好き」を3点、「③あまり好きでない」を2点、「④嫌い」を1点とした。結果は $r=0.508$ で中程度の相関があることがわかった。態度面がポジティブであれば成績もよい傾向にあることがわかる。



<sup>5</sup> 前掲「琉球大学教育学部紀要」、2014年2月

(3) テストスコアと家庭学習の相関

家庭学習に関する項目を点数化してスコアとの相関をみた。相関係数は0.277で弱い相関であることが分かった。家庭学習がテストスコアにつながっていない可能性がある。



	スコア	家庭学習
スコア	1	
家庭学習	0.277472	1

スコアと家庭学習の相関について、指導教員へインタビューしたところ、「相関があまり高くないことは納得できる」ということであった。A校においても同じような傾向が見られたことから、英語に限らず、沖縄県においては、「がんばりノート」の実践が広がっており、ノートの頁数や冊数などというように、学習の「質」よりも「量」にこだわった実践が広がっている可能性がある。極端な言い方をすれば、意味も分からず、発音もできず、文中でどのように使われるかも理解せずに単語を何回書いても、それは学力には繋がっていないのは当然である。

(4) 通塾生と非通塾生の比較

通塾生236名と非通塾生（塾へ行っていない生徒）195名のグループをF検定にかけたところP値は0.334692051で0.05よりも大きいため等分散であることがわかった。T検定（等分散を仮定した2標本による検定）にかけたところ、P値が0.05よりも大きいため統計的な有意差は

ないことが分かった。この結果から、塾へ行っているからといって必ずしもスコアが高いわけではなく、学校での学習でも十分に高いスコアをとることが可能であることがわかる。

	通塾	塾なし
	232	195
平均	229.8730159	219.8689655
分散	3694.338454	4077.878544
観測数	63	145
自由度	62	144
観測された分散比	0.905946171	
P(F<=f) 片側	0.334692051	
F境界値 片側	0.690675326	

	通塾	塾なし
平均	229.4142857	219.6986301
分散	3366.362112	4053.991308
観測数	70	146
プールされた分散	3832.279091	
仮説平均との差異	0	
自由度	214	
t	1.0795484	
P(T<=t) 片側	0.14077927	
t境界値 片側	1.652005156	
P(T<=t) 両側	0.281558541	
t境界値 両側	1.971111258	

(5) 部活生と非部活生の比較

部活生（部活動をしている生徒）の平均点は221.66点で、非部活生（部活動をしていない生徒）の平均点は227.7点である。両グループをF検定にかけたところP値は0.0968852で0.05よりも大きいため等分散であることがわかった。T検定（等分散を仮定した2標本による検定）にかけたところ、P値が0.53215187で0.05よりも大きいため統計的な有意差はないことが分かった。部活動に参加しているからといって成績が悪



いということは認められない。F 校の 1 年生に対しては部活動が学習に影響のない範囲で適切に行われていることが示唆される。

F-検定：2 標本を使った分散の検定		
	部活あり	部活なし
平均	221.658228	227.6964286
分散	3557.71684	4683.778896
観測数	158	56
自由度	157	55
観測された分散比	0.75958258	
P(F<=f) 片側	0.0968852	
F 境界値 片側	0.70588623	

t-検定：等分散を仮定した 2 標本による検定		
	部活あり	部活なし
平均	221.658228	227.6964286
分散	3557.71684	4683.778896
観測数	158	56
プールされた分散	3849.85558	
仮説平均との差異	0	
自由度	212	
t	-0.6257502	
P(T<=t) 片側	0.26607594	
t 境界値 片側	1.65207292	
P(T<=t) 両側	0.53215187	
t 境界値 両側	1.97121701	

## V F 中学校の授業実践の概要

沖縄県においては、中学校 2 学年を対象に学力到達度調査を実施している。F 中学校と沖縄県の平均を記したのが以下の表である。

### <沖縄県学力到達度調査（正当率）結果>

	県平均	F 中平均
平成 23 年度	54.5%	63.1%
平成 24 年度	55.4%	65.0%
平成 25 年度	58.6%	64.0%

F 中学校は毎年のように県の平均を大きく上回っている。一人の教師の取組というよりも、学校（英語科）全体の安定的な授業への取組の成果と思われる。本調査の目的は、沖縄県における英語教育の実態を把握することにあるが、その次に目指すのは教師の授業力と生徒の英語力の向上である。F 中学校の取組の概要を記すことは、他の学校の参考になる。以下に、F 中学校英語科の取組の概要について記す。

### 1. 週時程に位置づけた教科会

F 中学校は 6 人の英語教師で英語の授業を担当している。生徒の英語力を向上させるためには、学年を越えた一貫した指導が大切である。また、複数の教員が同じ学年を担当する場合は、教員間のコミュニケーションは欠かせない。F 中学校では、週時程に教科会を位置づけ、その時間に教材の共有や帯活動の工夫、様々な授業の取組などについて話し合いを行っている。

また、平成 24 年度より中頭地区教育課程研究指定を受けたことから、それ以前は、各教師の自由な考えにもとづき授業が展開されていたが、それ以降は、英語科の研究成果を踏まえながら、Can-Do リストを取り入れた共通した授業の取組を行っている。

筆者も数回にわたり教科会へ参加した。教科会の内容例を以下に示す。

#### 第 15 回英語科教科会

平成 25 年 11 月 26 日（火）

1. 第 2 回英検合格者
2. 教科書の使い方  
前回で資料配付済み  
Y 先生から補足説明
3. 次年度準備  
次年度英語科研究テーマ  
ノート、ドリルブックの選定
4. 研究レポートについて
5. 県指定学力向上先進地域育成事業について

教科会は毎回アジェンダが配布され、短い時間ではあるが効率的になされている。この教科会が、

それぞれの授業のレベルを平均化、もしくは上げていった役割は大きいと思われる。

### 2. 1クラス2展開の授業

2学年においては加配教諭を配置し、1クラスを2つに分けた小人数（20名）の授業が展開されている。その事が、F中学校の学力向上を支えている原因の1つになっていると思われる。ただし、平成26年度については、前述したアンケート結果にも表れているように、2年生の授業への理解度が他の学年に比べて低くなっている。1クラス2展開の授業が適切になされたのかどうか、検討が必要である。

### 3. Can-Do リストと Today's 1文

F中学校では3年間を見通した「F中 Can-Do リスト」を作成している。このリストは全学級に掲示し、生徒がいつでも各単元の目標を見ることができるようになっている。生徒も教師も本時の目標を明確に意識し、授業が展開されている。

授業は、はじめに、Today's Can-Do が示され、授業の最後は、本時の目標で示された1文をしっかりと書くことで終わっている。

例えば、筆者が参観した2年生のS先生の授業では、Today's Can-Do として「『おかわりしてもいいですか』と許可を求める会話をし、パスポートに国名を書くことができる」という本時のCan-Do が示された。そして授業の最後には、実際に May I ...? の表現を使って Can-Do で示された表現を書かせる活動を行った。この授業の流れは全学年・全クラスで行われている。

F中学校が独自にアンケート調査を行ったところ、どの学年でも7割以上の生徒が、Can-Do リストを活用することに好意的であった。また、授業の最後に、示されたCan-Do にもとづき英文を書く活動についても、全学年の8割以上の生徒が「英語の力がつく」と回答している<sup>6</sup>。Can-Do リストを作成して終わりということではなく、実際にCan-Do リストを活用した授業が展開されていることが、F中学校の英語力向上に役立っていると思われる。

## VI まとめ

F中学校の英語教育の実態を、アンケートを通して検討した。また、1年生については、アンケートと英語能力判定テストとの相関をみながら検討を行った。さらに、筆者の観察や、F中学校の教育課程研究会での発表及び発表資料から、F中学校の授業の取組の特徴を紹介した。

アンケートの結果からは、全体的に見ると、全ての項目において、比較的好ましい結果が示されていることが明らかになった。

特筆すべきことは、前述したように、2年生においては課題があるが、「授業をどのくらい理解していますか」という質問に、1年生は「とても理解している」「理解している」を合わせると86.1%、2年生は72.2%、3年生は79.2%と高い割合を示していることである。調査項目は異なるがベネッセが全国の中学生にアンケートをとったところ、「ほとんど分かっている」と「70%ぐらい分かっている」を合わせると64%である<sup>7</sup>。F中学校はこの数字を大きく上回っている。授業を理解していることが沖縄県の学力到達度調査の結果にも表れているものと思われる。また、F中学校の授業の概要で示したように、Can-Do リストと Today's 1文などの授業実践が、どの学年・クラスでも共通して行われている。Can-Do リストと Today's 1文は、生徒の実態に即したものであり、かつ、基本的な内容である。この共通した取組は、生徒の成績を底上げしているのではないかと考えられる。

部活動も盛んな学校であるが、部活動が学習面に悪影響を与えていることは確認されなかった。通熟生と非通熟生のグループを比べた結果、両グループには統計的な有意差はなかった。学校の授業だけでも十分学力を付けられることが示された。

課題としては、家庭学習と成績の相関が極めて低かったことである。家庭学習が実際に力をつけ

<sup>6</sup> 宜野湾市立普天間中学校「平成25年度中頭地区教育課程研究会報告書」

<sup>7</sup> ベネッセ教育総合研究所「中高生の英語学習に関する実態調査2014」、2014年10月

るものとなっているかどうかの検討が必要である。

また、小学校の時に英語が好きだったかどうか、中学校での英語の好悪に影響している可能性を指摘した。しかし、一方で、F 中学校の 1 年生は、小学校の時に英語が「とても好き」と「好き」を合わせると 62.5%であったが、「現在英語が好きですか」という質問に、「とても好き」「好き」を合わせると 83.1%になっている。小学校では「嫌い」「どちらかという嫌い」と答えた児童が 20%程度「好き」「どちらかという好き」に転じている。小学校で嫌いになったからと言って諦めてしまう必要は全くないことが分かる。

Can-Do リストにおいては 4 技能が等しくリスト化されているが、評価においても等しく評価されているかどうかは不明であった。指導と評価の一体化と学年共通の評価方法について検討する必要がある。特にスピーキングの評価を全学年が一元となってどのように実施していくかが今後の課題である。

本研究においては、その多くを生徒の態度面や英語能力判定テストの結果の検討に費やした。生徒や教師の目がテストの結果だけにいってしまうと、授業もテスト対策になってしまいがちである。筆者らは、この研究を続けながらも、授業がそのようにならないことに注意してきた。教室から生徒の笑顔が消えることになれば、この研究を続ける意味はない。数字としては表れない生徒の笑顔を担保しながら今後も研究を進めていきたい。

付記：本研究は公益財団法人日本英語検定協会の受託研究（児童英語検定及び英語能力判定テストを利用した児童・生徒の英語力及び態度面に関する研究）及び沖縄県学力向上先進地域育成事業の一環として行ったものである。また、F 中学校からは全面的な協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。